二年古典講読　『百人一首』復習問題演習①

はじめに

これまで『百人一首』の「春の歌」「夏の歌」「恋の歌」（飛鳥時代～平安時代前期）を学んできましたが、本時は復習として問題演習をやりましょう。次の各問いに答えてください。休校明けの単元テストもここから出るので、しっかり復習しましょう。解答し終わったら採点・訂正を行い、アンケートに回答してください。　なお、今日から休校中の課題提出は平常点に入ります。

問一　『小倉百人一首』の編者はだれか。（　　）

問二　成立したのは何時代か。（　　）時代

問三　テーマ毎の分類を部立てというが、『百人一首』の部立ての中で最も数が多い部立ては何か。（　　）

問四　四季の歌の中で最も歌の数が多いのはどの季節か。（　　）

問五　百人一首で札の取り合いをする際、そこまで読まれればその札だと確定できる部分のことを何というか。（　　）

問六　次の①～⑥の上の句について、下の句を後の選択肢から選びなさい。

〈上の句〉

① 花の色は移りにけりないたづらに　（　　）
② 人はいさ心も知らずふるさとは　（　　）
③ わびぬれば今はた同じ難波なる　（　　）
④ 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを　（　　）
⑤ 忘らるる身をば思はず誓ひてし　（　　）
⑥ 君がため春の野に出でて若菜つむ　（　　）
⑦ 立ち別れいなばの山の嶺に生ふる

〈下の句〉

〈選択肢〉

ア　みをつくしても逢はむとぞ思ふ
イ　人の命の惜しくもあるかな
ウ　我が衣手に雪は降りつつ
エ　まつとし聞かば今帰りこむ
オ　雲のいづこに月宿るらむ
カ　わが身世にふるながめせしまに
キ　花ぞ昔の香ににほひける

問七　次の歌の部立てを答えなさい。

① あしびきの山鳥の尾のしだり尾の　ながながし夜をひとりかも寝む　（　　）
② 有明のつれなく見えし別れより　暁ばかり憂きものはなし　（　　）
③ 難波潟短き芦のふしの間も　あはでこの世をすぐしてよとや　（　　）
④ 風そよぐ楢の小川の夕暮れは　みそぎの夏ぞしるしなりける　（　　）
⑤ いにしへの奈良の都の八重桜　今九重に匂ひぬるかな　（　　）

問八　次の①～⑤の歌について、後の問いに答えなさい。

① みかの原わきて流るるいつみ川　いつ見きとてか恋しかるらむ
② 久方の光のどけき春の日に　しづ心なく花の散るらむ
③ 住の江の岸に寄る波よるさへや　夢の通ひ路人目よくらむ
④ 陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに　乱れそめにしわれならなくに
⑤ 浅茅生の小野の篠原しのぶれど　あまりてなどか人の恋しき

問1　枕詞とそれが導く語を答えなさい。

問2　序詞をすべて抜き出し、それぞれが導く語句も答えなさい。

問３　③と④の歌から掛詞をそれぞれ一つずつ抜き出し、何と何が掛けてあるか答えなさい。

問九　次の傍線部の助動詞の文法的意味を答えなさい。。

①　久方の光のどけき春の日に　しづ心なく花の散るらむ

②　夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを　雲のいづこに月宿るらむ

③　みかの原わきて流るるいつみ川　いつ見きとてか恋しかるらむ

④　人はいさ心も知らずふるさとは　花ぞ昔の香ににほひける

問１　①～④の歌の傍線部には、それぞれ一つずつ助動詞が含まれている。それぞれの文法的意味を答えなさい。

問２　傍線部をそれぞれ口語訳しなさい。

問３　④の歌の作者は『古今和歌集』の撰者の一人で、序文「仮名序」を書いた人物である。氏名を漢字で答えなさい。